



# からしだね

2017年4月号  
(526号)

キリストの受難 カトリック池田教会

共同宣教司牧：畠 基幸 神父・中村克徳 神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：<http://www.ne.jp/asahi/catholic/ikeda/church/index.htm>



## 本号の記事の主題など

- 畠基幸神父の巻頭言「主の復活の命に向かってポストモダンとパラダイムとライフスタイル」・・・ 2
- 一斉地区集会が開かれました・・・・・・・・・・ 4
- サイコロの会1年を振り返って・・・・・・・・ 4
- ルイビルでの思い出・・・・・・・・・・ 8

- からしだねへ届いた手紙・・・・・・・・・・ 8
- 回勅「ともに暮らす家を大切に」を読んで・・ 9

毎号載る評議会議事録などは省略

## 巻頭言

## 主の復活の命に向かって

## ポストモダンとパラダイムとライフスタイル

畠 基幸 CP

「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」(マタイ24:35)

今年も復活祭が巡ってまいりました。洗礼者を迎え、2017年度の教会活動が始まります。福者ユスト高山右近の年として「新しい福音宣教への道」を模索しながら、私たち自身の信仰の道を確認し深める一年となりますように司牧チームは願っています。

さて、これまでも説教や巻頭言で、回勅「ラウダート・シ」を読むように皆さんに案内したり、読書会を始めるように勧めました。この回勅は、固い社会教説で「インテグラル(総合的)なエコロジーの考察」と書くだけでも、難しく感じる回勅です。日本語の限界なのか翻訳の限界なのか、しかし新しい世代はカタカナ語を自分の言葉で消化して日常的に使い、メディアでもカタカナ語は氾濫しています。そこで「ラウダート・シ」に頻繁にでてくる「パラダイム」という言葉、そして「近代」をどう評価するのか、さらに、これからの私たち自身(信仰者)のあり方としての「ライフスタイル」の前提となる背景をまとめてみました。教皇様の回勅が身近なものとなりますように。

1) 近代をどう評価するのか? 回勅には、「ポストモダン」(p174)は一回だけ使用されています。「ポストモダンの人類」が近代のテクノ・エコノミック(技術経済)パラダイムの影響を受けて、消費による自由という幻惑と混乱の中から新しい展望を見出していないという文脈に出てきています。「モダン」をどう読み解くか? 教会史の観点からは、1500年は「近代」という時代が始まる境目の年です。「近代」は、さらに三期に分けられます。第一期は、1500年から1700年、宗教改革とカトリック

改革の時代です。第二期は、フランス革命から第一次世界大戦(1789~1918年)、第三期は、1918年から現代までと分けられます。そして「ポストモダン」は、一般には「現代という時代を、近代が終わった「後」の時代として特徴づけようとする言葉。各人がそれぞれの趣味を生き、人々に共通する大きな価値観が消失してしまった現代的状況を指す(知恵蔵)」。思想的には、「近代主義が意味を失った時代」や「人間性の自律・自由の拡大による進歩や真理による歴史の発展物語が終焉」した「後」の時代の区分です。

教会史にとっては、古代から中世、中世から近代、そして現代へと、パラダイムシフト(ある時代に支配的なものの考え方や認識の枠組みが劇的に変化すること—科学史家トーマス・クーンが科学革命で提唱)があった言えるわけですが、混迷する「ポストモダン」に今すべきことを語っているのは、教皇フランシスコのこの回勅かもしれないというのがわたしの独断偏見です。つまり、「イエスの時」から救いのパラダイムは変わっていないと……。

(2) パラダイムとはどのようなものか? パラダイムは、その時代の支配的な考え方の枠組みです。回勅では、技術主義パラダイム、文化的パラダイム、認識論的パラダイムなどのパラダイムがありますが、近代が行き着いたパラダイムが、「未分化な一次元的パラダイム」です。それは、「論理的かつ合理的な手順を駆使して外部の客体に迫り、それを統制下に置く主体です」(p96)。

西洋古代中世哲学史の教科書を眺めてみて、このパラダイムの発起人を上げるとすると、イギリスのフランシスコ会神学者ウィリアム・オッカム(1290~1349)です。彼の唯名論は14世紀・15世紀の大学で広く教えられていました。そして、彼

こそは、16世紀の教会改革と自然科学の成立を準備した人物です。ここで、オッカムを語るには、わたしはあまりにも無知なので控えますが、一人の人物の思想の影響に驚きます。教会改革への影響としては、ドイツのルター、またエラスムスやイグナチオも滞在したことのあるモンテギユ学寮で学んだカルヴァンもオッカム主義の神学を独学したと伝えられます。その基本は、聖トマスの「存在」を対象とする形而上学を批判したところにあります。カトリックの伝統では、恵みは自然を前提として見えない神のしるしであり、教会の権威はそこから汲み取られるのですが、オッカムは、自然から神を推論する存在証明を不可能と断言し、神と人間には断絶があり、人間の側からは神は知り得ない領域としたのです。しかし、神は全能であるがゆえに、神がご自分を啓示する場合のみ、人間は神を知ることができる。この考えは、カルヴァン派やルター派の聖書のみ、信仰のみ、恵みのみプロテスタントの個人の信仰告白を尊重する教会観の土台となりプロテスタントの教会改革の原動力になったのです。

一方で、カトリック改革の旗手、聖イグナチオは、15～16世紀の霊的指導書「キリストに倣いて」の影響を受け、主イエスが弟子と対話的に霊的指導する方法に導かれ「霊操」を創作しました。出来事の中に神の意志を識別する実践方法です。彼には教会は単なる制度ではなく、生きている「キリストのからだ」であり、教会への従順は識別の基本でした。聖トマス神学を支持し、恵みと秘跡の教会を擁護し、仲間を集め、イエズス会を創立したのです。その第四誓願は、教皇への忠誠でした。トレント公会議(1545年～1563年)には二人のイエズス会会員を神学者として参加させていました。この公会議は教義に関する誤謬を取り上げて、カトリックの教義をより明確にし、聖トマス神学の正統性を確かなものと認めたのです。(「教会史提要」アウグスト・フランツェン エンデルレ書店)

聖フランシスコ・ザビエルが日本に来て、キリスト

教を宣べ伝えたとき、同時代のヨーロッパは、新しい宗教・政治・経済の体制への胎動期でした。それは、純粋に客観的に経験と実証で観察する科学的な洞察(オッカム主義)の発展が神の権威を必要としない理性と自由の人間中心のパラダイムを準備したのです。そして、フランシスコ・ベーコン(1561～1626)は、高山右近の同時代人ですが、「技術の自然に対する競争の勝利」を宣言し、「進歩への信仰」に近代の歩みを導きました。(教皇ベネディクト16世、回勅「希望による救い」p40)。近代科学技術の発展は、人間の幸福を約束し、新しい救いのパラダイムとなったのです。

(3) ライフスタイルの言葉の意味は、個人の生き方や生活習慣ですが、この時代を支配する救いのパラダイムへの対抗手段としてライフスタイル変えるように望んでおられるのです。「まだ間に合う」と教皇様は回勅でいわれました。近代の誤った救いのパラダイムを変えなければなりません。神の救いのパラダイムは、いつくしみの愛の福音で新約時代から変わっていない。これがフランシスコ教皇様の基本の考えではないか？変化してきたのはライフスタイルだけ。エコロジカルな回心とは、ライフスタイルの変更であり、それは地球に住む人類が家族となるようにという目的をもって他者に貢献する生き方です。13世紀のアジジのフランシスコはたった一人から、自然界も兄弟姉妹として対話するライフスタイルを始めたのです。彼は神と自然と他者とそしてわたしが結ばれる「楽園」を回復しました。わたしたちは「根源的なある」から「わたしはここにある」ように呼び出されたのです。目覚めましょう。私たち皆が復活のイエスの命に生きるために！！！！



…執着しない

## 年度末の一斉地区集会在開かれる

24日(日)ミサ後カール記念館食堂に24名が集まりました。みことばの分かち合いから始まり、次年度各種役割分担や連絡網の確認・修正など、皆積極的に行われました。

新しく来られた方が2名居られたので、その方の紹介もしました。今年度の川西市の教会行事の協力は復活祭なので、たくさんのお手伝いが必要とされます。それでも、皆が積極的に手を上げて下さり、スムーズに決まりました。電話連絡網については携帯の番号があると留守の時でも連絡がしやすいとのことでした。

おにぎりやお菓子を食べながら、和やかに終えることができました。

高橋

- 7/28 冷やし中華、22名。
- 9/7 夏野菜カレー、中村神父様他 12名。
- 10/24 松茸ご飯と天ぷら、畠神父様・中村神父様他 23名。
- 11/30 けぶり河温泉へ行き、温泉とバイキング・車窓から紅葉、16名。
- 1/5 お雑煮とフライ、畠神父様・中村神父様他 25名。
- 2/13 映画「沈黙」鑑賞と昼食・お茶、畠神父様他 16名。

参加費は第1回が300円、2回目以降は500円、開催場所を温泉と映画館にした場合の実費は温泉が2000円と映画がチケット1100円、昼食・お茶代は各自払い。各回の会費が余った場合には、次回に少し繰り越しながら、教会へ8330円の献金をしました。

ゆっくり絆が深まって、教会がごミサに参加し、仕事をする場所、たまにパーティーをする場所、にとどまらず、交わりの場、くつろぎの場、助け合いの場となっていけたらいいなあと思っています。また、助け合いなどが気楽に行われる場ともなればうれしいです。これからも、どんどん参加して下さる方が増えて、交わりが深まったらと願っています。知り合いがないからと心配しないで、知り合いを作るために参加してください。一同お待ちしております。

## サイコロの会1年を振り返って

島上

昨年の中頃、中高年の人たちが、気楽に集まらたらいねと森山さんと立ち話としたのがきっかけで、森山さん、藤阪さん、鋤納さんの行動力に後押しされて、月1度の食事会を始めました。賛成して下さる方はいるのだろうか、出席して下さる方はいるのだろうか、と心配しながら始めました。

案ずるより産むが易しで、1年間楽しい時をいろいろな方と過ごすことができました。私個人はいろいろな方とおしゃべりできて、うれしい1年でした。

一緒に作業して、一緒に食べ、おしゃべりする、テーマを決めて小さい分かち合いをする、そのことだけで、少しずつ距離が縮まったように感じます。各回の食事会のメイン・ディッシュあるいは行事と参加者数を示します。

- 4/12 おでん、松本神父様他 17名。
- 5/27 手巻き寿司、畠神父様他 25名。
- 6/27 サンドイッチ、15名。

## 表紙の絵「復活したキリスト」について

レンブラント・ファン・レインは青年イエスの像(2月号の表紙)と異なった印象を与える「復活したキリスト」を描きました。正面向きで描かれたキリストは、目をやや細めて、鑑賞者を見透かし、思いやりをもった目差しで見つめている。キリストの髭と長くカールした髪は、賢明さを示している。

「Rembrandt Rembrandt」、大レンブラント展、京都博物館、2002 より

4月のガラスケースのことば

求めなさい。そうすれば与えられるであろう

捜しなさい。そうすれば見つけるであろう

たたきなさい。そうすればひらかれるであろう

マタイ 7・7

## 「からしだね」へ届いた手紙

## ルイビルでの思い出

デニス・マクゴワン CP

修道院で2年間勉強して私達のクラスの7人が大司教様によってルイビルの司教座聖堂で司祭に叙階されました。次の日、私達7人は修道院の教会の聖アグネスの壁を囲むように造られた祭壇で初めてのミサを捧げました。

そして私は十字架の聖パウロの祭壇で私の妹、母と共にミサを捧げました。ミサが終わるとミサに与った人たちは新しい司祭達からの祝福を受けるために列になって並んでいました。

私のクラスメートの一人には二人の妹がいて同じ修道会のシスターでした。私は二人のことをとてもよく知っていたのに、修道服姿の二人はまるで双子のようで見分けるのが難しいくらいでした。私は、以前に、妹の方がウインクをして修道院長に「ウインクをするなんてシスターらしくない」と叱られた事があるのを知っていました。その二人が私の祝福を受ける時、片方のシスターが私にウインクをしました。それで私はそのシスターが妹の方のシスターだとわかりました。

(原文)

## Memories of Louisville

After two years of study at the monastery our class of seven was ordained priests at the cathedral by the Archbishop of Louisville.

The next day we celebrated Mass for the first time at the altars around the walls of St. Agnes the monastery church.

I celebrated Mass together with my mother and sister at the altar of St. Paul of the Cross. After Mass people lined up to receive the blessing of the new priests.

One of my classmates had two sisters both members of the same Religious Order.

I knew them both very well. But in their Religious dress they looked like twins and were hard to tell apart.

I knew before that the younger had been scolded by her Superior for winking, that it was "not proper for a Sister to wink."

When the two received my blessing one of them winked at me so I knew it was the younger. Denis McGowan C.P.

中村

当地夏の終わりとは申せ、先日40℃でした。(乾燥しているので耐えられますが) 広報各位に 改めてお礼を申し上げます。いつも有難うございます。

巻頭言、実に解りやすいいい文章ですね。営業職のエピソード、現場が想像できました。さぞお説教も解りやすく人気あり、なんでしょうね。

右近列福式、ユーチューブで三時間近くPCに噛り付いてウオッチ。大阪城ホールさぞ熱気に包まれたことでしょう。ヨハネパウロ2世教皇が来日なされたとき、私 妻と一緒にまだドームになっていない後楽園球場へ行きました。(神宮球場だったかしら、忘却) 国井神父様が司会進行役グループで活躍なさっていました。雪がちらつく寒い日でしたが、やはり「熱気」に包まれていたのを思い出します。

デニス神父様がお元気の様子。車いすでなく歩行器ながら歩いているのを誇らしく記しておられますね。じつに神父様らしく微笑ましく拝読。

昨日、月下美人が咲きました。翌朝サラダにして食しました。当地、夏。

日本の園芸愛好家には想像もできない事ですが、気温と乾燥がもたらす自然、健勝。もしお宜しければ添付写真をご覧ください。



皆様のご健勝をお祈りします。

三月三日 西豪州 パース市郊外にて

からしだねは皆様のご投稿や提案をお待ちしています！

今号の本ページと次ページには合計三つの投稿が掲載されています。

表紙用写真やご自分で描かれた絵の写真、俳句、短歌、信仰にまつわるエッセイなど、何でも大歓迎です。

## 回勅「ともに暮らす家を大切に」を読んで

大野

教皇フランシスコが「ラウダート・シ」を一昨年の聖霊降臨の祭日に出されたことは何度も聞いていますが、そこに何が書かれているのでしょうか。その日本語訳が昨年に発行されたのですが、副題に「ともに暮らす家を大切に」が付いているので、我が地球の環境危機についての訴えらしいことがわかりました。本文213ページの単行本の序を読むと、前世紀から工業産品とエネルギーの大量消費が廃棄物や大気汚染、大気温度上昇を生み、地球規模の生態系が元に戻せない程に大きく変化してしまっていると書いた教皇は、その原因は技術主義的パラダイムが現世を支配しているからだと言われました。そのパラダイムとは「ある時代を牽引する規範的思考方」を言うのですが、その技術主義的パラダイムが成果を全く出していないとは言えないのですが、その恩恵から排除された人類の多くや生態系の被造物(多くの動植物や大地、大気)と将来の人類を含む全被造物、そうです弱者に、大きな代価を払わせていると告発しているのです。そして、その地球規模の怒濤のような流れを転回させる対話と教育について、教皇はカトリックの立場から具体的に実行できそうな提言を詳しく説明されています。それでも、木を見て森を見ない読み方に陥れば、読み通すのが辛くなるので、思い切って取ってスキップさせてもらいました。

人々の生は神、他者、大地などの被造物との三種のかかわりを大切にしないでは営めませんが、ロボットとは違って身体が単なる部分でない一人ひとりが自分自身とのかかわりの不断の回心がなされないなら三者とのかかわりは築けないと断言されているところもあります。以下に抜粋したのは、回勅を読むわたしたちに自分自身とのかかわりをどのようにしたら、神・他者・大地とのそれぞれのかかわりを築けるかを示していると思われるところです。しかし、残念ながらこれらの中にはわたしにとって十分に納得できなかったのも少なくないのです(下線を引いています)。

回勅「ともに暮らす家を大切に」の残りの部分では、人類が存在する目的に反して人類が破壊した環境を持続可能なものにするために、一人ひとりの自分自身とのかかわりについての回心が共同体やより大きな社会の転回に結びつき、「ともに暮らす

家」の大きな流れを反転させるであろう多くの示唆が記されています。丸括弧の中に示す数字は六章からなる回勅の全編を通しての序数で、節と呼ばれているようです。その節の全文を引用しているではありません。

(65) 創世記冒頭の第一の創造記事は、人類を創造することが神の計画に含まれているとして、次のように続きます。男と女を創造なさった後、「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めてよかった」(創世記1・31)のです。

すべての人は愛から創造され、神にかたどり神に似せて造られた(創世記1・26)と聖書は教えます。これは、「人は単なるものでなく、人格」であり、「自分を知り、自分を所有し、自分を自由に与え、他の人々と親しく交わることが出来る」一人ひとりの人の計り知れない尊厳を示しています。聖ヨハネ・パウロ二世は、創造主のそれぞれの人間に対する特別な愛が、「その人に無限の尊厳をさずける」と述べました。

(66) 「創世記の中の創造記事は、それぞれ象徴的で物語的な言語で、人間存在とその歴史的現実についての意味深長な教を語ります。密接に絡み合う根本的三つのかかわり、すなわち、神とのかかわり、隣人とのかかわり、大地とのかかわりのよって、人間の生が成り立っていることを示唆しています。聖書によれば、命にかかわるこれら三つのかかわりは、外面的にもわたしたちの内側でも、引き裂かれてしまいました。」そして、これらとのかかわりの断絶は罪となります。

意味深いことに、アッジジの聖フランシスコがすべての被造物と共にあって経験した調和は、そうした断絶の癒しとして理解されたのです。聖ボナヴェントゥラは、聖フランシスコが、あらゆる被造物との普遍的な和解を成し遂げることで、なんらかの意味で原初の無垢の状態に戻ったのだと受け取れます。戦争、種々の暴力や虐待、最も脆弱な者の放置、自然への攻撃に、罪の破壊力の全てが露わになっている今日のわたしたちの状況は、聖フランシスコが行っていたこととは似ても似つかぬものなのです。その点で現代のわたしたちは罪を免れないのです。

(次号に続く)

## 宝塚黙想の家から

## 黙想会のお知らせ

■ 日帰り黙想会 指導:山内十束神父

4月20日(木)10:00~15:30

4月21日(金)10:00~15:30



■ 週末黙想会

4月29日(土)17:00~4月30日(日)15:30

指導:山内十束神父

■ 聖週間黙想会 指導:山内十束神父

4月13日(木)17:00~4月16日(日)朝食後

黙想会、費用等のお問い合わせは

「宝塚黙想の家」まで。☎0797(84)3111

## 編集後記

1517年ルターがドイツで『95ヶ条の論題』を掲示してから500年を迎えるという。宗教改革の影響は、多岐に渡り与え続けている。其の一つとして、ルターの事件後わずか32年で聖フランシスコ・ザビエルが鹿児島に到着していることに、注目したい。これは、カトリック内での反宗教改革の熱意とその迅速な行動が、具体的となった証と、いえそうである。もし、宗教改革があつた時代になかったなら、日本への布教はもっと後世になっていただろうし、キリシタン大名の出現も難しい。

今年は両派との対話や行事が国の内外であり、お互いを知る良い機会と思える。

天使の微笑